

(2021 年 9 月 20 日受稿 2021 年 10 月 26 日受理)

【資 料】

高等特別支援学校（知的障害）寄宿舎教育に関する 寄宿舎生への聞き取り調査

小野川 文子（北海道教育大学釧路校）

連絡先 E-mail : onogawa.fumiko@k.hokkyodai.ac.jp

はじめに

特別支援学校に併設された寄宿舎は遠距離による通学保障・就学保障のみならず、寄宿舎における教育を通して障害・病気等による「育ちと発達の困難」を有する子どもの発達を促し、家族支援も含めた実践を展開している（小野川・高橋：2012, 2013, 2016）。寄宿舎設置については、学校教育法第 78 条に「特別支援学校には、寄宿舎を設けなければならない。ただし、特別の事情のあるときは、これを設けないことができる」と規定されている。寄宿舎を設置しない「特別な事情」¹⁾とは、学校の近隣に施設・病院等がある場合を指し、その判断は設置者である都道府県に委ねられている。

小野川・高橋（2019）によると、全国の寄宿舎併設特別支援学校（公立）は 2018 年 4 月時点で 293 校（設置率 27.1 %、全体 939 校）であるが、特別支援教育の制度化前の 2005 年 4 月時点の 318 校（設置率

36.9 %、全体 861 校）と比較して 25 校減（7 校増 32 校減）となり、設置率は 10 パーセント近く低下している。障害種別の設置率を見ると、2018 年度は、知的障害・肢体不自由・病弱特別支援学校は 18.7 %と顕著に低く、2005 年の 23.6 %からさらに低下し続けている（表 1）。

寄宿舎設置率の低下は舎生数の減少につながっている。2010 年度までの全国の舎生数は 10,000 人前後で推移していたが、2010 年度から明らかに減少している。全特別支援学校の児童生徒数に対する入舎生の割合では、10.9 %（全国特別支援学校在籍児童生徒数 94,805 人、

表 1 全国の公立特別支援学校寄宿舎の設置数と設置率

障害種	2005 年度		2018 年度	
	寄宿舎数	設置率	寄宿舎数	設置率
視覚障害	63	94.0%	59	92.5%
聴覚障害	74	71.8%	62	74.7%
知・肢・病	182	23.6%	176	18.7%
合計	318	36.9%	293	27.1%

小野川・高橋（2019）より引用

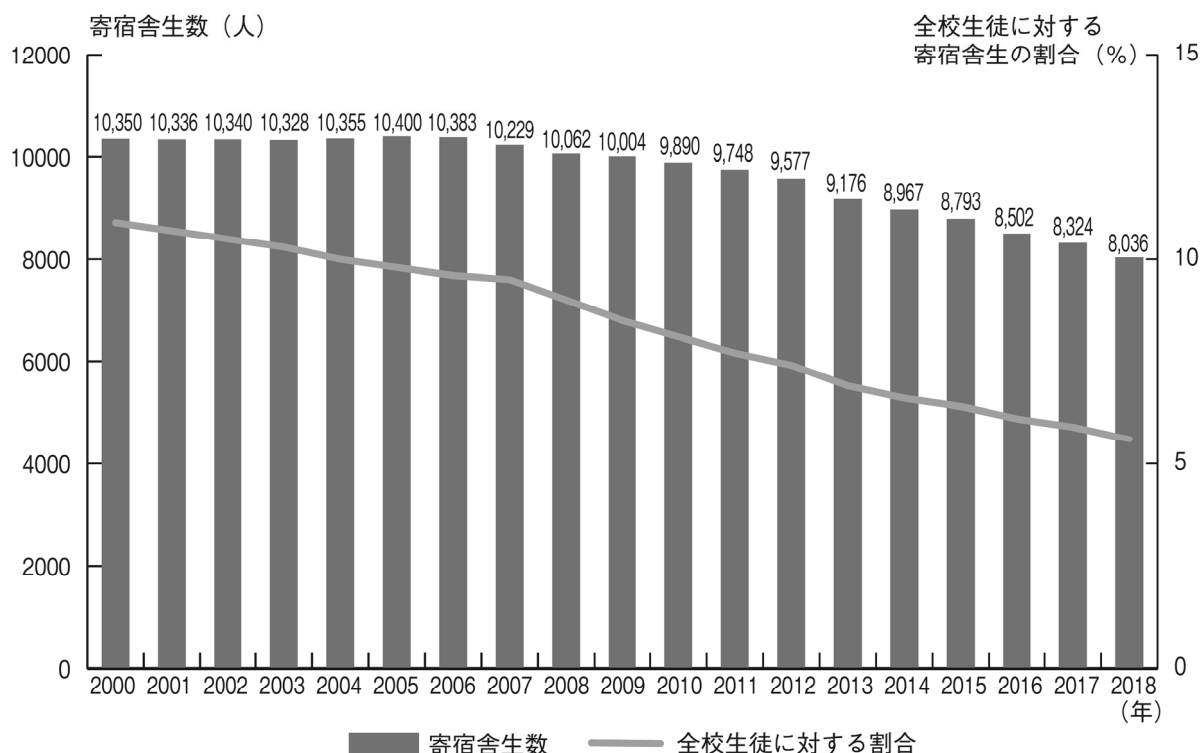


図1 2000年度～2018年度の寄宿舎生の推移
学校基本調査（2000年度～2018年度）より著者作成

寄宿舎生 10,350 人）から 5.6 %（143,379 人，8,036 人）に急落している（図 1）。今後さらに、複数の障害種を対象とした学校再編が行われると、「通学困難」は解消され、寄宿舎の統廃合が進むことが予測される。

一方で、いくつかの自治体で軽度知的障害を対象とした新設の高等特別支援学校に寄宿舎設置の動き²⁾があり、2010 年以降では公立 5 校、私立 1 校が開設されている（北海道、宮城県、山梨県、鳥取県、鹿児島県と私立大学附属）。かつて大泉（2010）は、「1990 年以降、さかんにつくられた高等養護学校は、全寮制ないしはそれに準ずる形をとった。義務教育段階の寄宿舎の必要性についての教育行政の意味づけとは違っていた」とし、「中学や高校の学齢となれば家庭ではない居住の場を準備し、独りではなく同世代の仲間たちとともに寄宿舎指導員という生活のプロの見守りと教育的支援のもとで、自分で生きる人生のスタートをきること

は十分意義のあること」と述べ、思春期・青年期における寄宿舎教育の重要性を指摘した。しかし、ここ 10 年間の寄宿舎設置の動きは、ほとんどが全県の生徒を対象とした高等特別支援学校であり、従来の「通学困難のための寄宿舎」の域を脱していない。あらためて、特別支援教育・インクルーシブ教育における寄宿舎教育の役割を明らかにする必要がある。

近年、一般就労を目指す知的障害を対象とした高等特別支援学校へのニーズが高く、加えて、高等部卒業後の離職率の高さ、その背景にある関係性・コミュニケーションを含む「育ちと発達の困難」が指摘されている（原田・寺川：2017，小野川・高橋：2018，高橋・池田：2017，田中ら：2009，東京都社会福祉協議会：2008）。こうした「育ちと発達の困難」を有する障害のある子ども、とりわけ思春期・青年期の子どもにおいては、ますます寄宿舎教育の重要性が増していると考え、障害のある子ども

の生活実態や発達の困難・ニーズから求められる寄宿舎教育の役割を明らかにしていくことが、教育行政上の位置づけである「通学困難のための寄宿舎」からの脱却を可能とする。

「通学困難のための寄宿舎」とは、広域の子どもを対象とする特別支援学校側の、すなわち行政や学校側の都合である。そこで暮らす子どもたちの思いや願いを反映しているわけではない。また、これまでの実践研究においては、実践者の視点での分析であり、これも十分とは言えない。したがって、障害のある子どもが思春期・青年期にどのような悩み・願いを抱きながら生活しているのかを丁寧に聞き取り、寄宿舎教育の役割を考察することは不可欠だと考える。

当事者への聞き取り調査としては、寄宿舎を経験した卒業生調査がある（小野川・高橋：2015、小野川・田部・高橋：2016）。ここでは、保護者・教職員と卒業生が感じている生活上の困難やニーズにズレがあると指摘されている。例えば、小野川・高橋（2015）の調査では、「親が自分に一生懸命になればなるほど親に申し訳ない」「親は親の人生を楽しんでほしかった」と語っている。また、友だちとの生活は「同じ障害のため家より楽だった」と話し、障害のある仲間との生活経験の重要性も指摘している。したがって、障害児の生活と発達の権利を保障する寄宿舎教育へと発展させていくためには、当事者からの視点で検討することが重要である。

1. 研究目的と方法

（1）研究目的

特別支援教育推進の中で全国的に寄宿舎の廃舎・統廃合が進行していることを受け、知的障害当事者が中学校・高校時代に感じてきた悩み

や願いを明らかにし、寄宿舎のような親元から離れ仲間と暮らすことの意味を考察することとする。

（2）調査設計

1）調査の手続きと対象

調査対象は、寄宿舎併設 A 高等特別支援学校（9割以上の生徒が寄宿舎生）の寄宿舎に入舎する2年生と3年生を調査の対象とした。調査にあたっては学校長に調査の趣旨、内容、手続き等を説明し、調査への協力を依頼した。そのうえで、学校を通じて2年生・3年生の全寄宿舎生74人の保護者に対し調査協力を文書依頼した。調査に同意が得られた場合は、「研究協力同意書」に保護者と研究協力者である寄宿舎生に署名をした上で提出を求めた。研究協力を同意が得られた寄宿舎生は26人（男性16人、女性7人）であった。

なお、本稿では、回答者を指すものには「寄宿舎生」、「寄宿舎生」の姿から高校生一般について論じるときには「高校生」と表記した。

2）調査内容：①高等特別支援学校入学前（主に中学校時代）の家庭や学校での生活の様子、②現在の家庭での生活状況と生活上の困難・ニーズ、③家族の状況と家族の困難・ニーズ、④保護者の健康状況と健康上の困難・ニーズ、⑤親子関係の状況と親子関係上の困難・ニーズ、⑥高等養護学校入学と寄宿舎入舎の理由、⑦寄宿舎生活を通しての自身や家族・保護者の変化、⑧寄宿舎への要望、についてであった。

3）調査方法：半構造化面接法調査。上記の調査内容にある8つの項目について回答を求めた。各質問は書面でも研究協力者に提示し（同書面は付表参照）、それを調査者が読みながら質問するという形ですすめた。必要に応じて追加質問しながらすすめた。なお、障害程度や障害については保護者に確認した。回答については、本人の承諾のもと、録音ないしは筆記し

高等特別支援学校（知的障害）に在籍する生徒の生活実態と

寄宿舎教育ニーズに関する調査

【ご回答いただく方】

- (1) 学科（ ）科 学年（ ）年
 (2) 卒業後の進路希望
 ①一般の企業 ②役所などの公務員 ③福祉事業所（就労継続支援A型、就労継続支援B型、生活介護） ④家事手伝い ⑤その他（ ）

<家庭生活について>

A. 家庭生活の状況

平日と長期休業中、家庭では誰とどのように過ごしていますか。

(平日)

1. 主に誰と過ごしていますか。
 ①母親 ②父親 ③祖父母 ④兄弟 ⑤ヘルパー等 ⑥友だち ⑦子ども1人で過ごしている
 2. 主にどのように過ごしていますか。
 ①家の中で、テレビ、ビデオなどを観て過ごしている ②インターネットやゲーム(携帯電話含む)、おもちゃ等で遊んでいる ③買い物や散歩など、なるべく家以外で過ごしている ④友だちと遊んでいる ⑤スポーツクラブや習い事に通っている ⑥放課後デイサービスや学童保育に通っている ⑦家で音楽など聴きながら、休養中心 ⑧その他（ ）

(夏休みなど)

3. 主に誰と過ごしていますか。
 ①母親 ②父親 ③祖父母 ④兄弟 ⑤ヘルパー等 ⑥友だち ⑦子ども1人で過ごしている
 ⑧放課後児童デイサービスや学童保育等で、家族以外の人と過ごしている
 ⑨その他（ ）
 4. 主にどのように過ごしていますか。
 ①ほとんど家の中で過ごしている ②買い物や散歩など、なるべく家以外で過ごすようにしている
 ③キャンプ等、様々な活動に積極的に参加している ④放課後児童デイサービスや学童保育で過ごしている ⑤その他（ ）

B. 生活上の困難・ニーズ

5. 生活で困っていたことはありますか。例えば、体や健康の心配、友だち関係、なかなか外出できない等の悩みをお聞かせください。

1

6. 今、「こんな生活がしたい」という思いはありますか。例えば「自由に外出がしたい」「友だちと過ごしたい」等をお聞かせください。

<家族の状況>

A. 当時の家族の状況

7. 同居されているご家族を教えてください。(本人、)
 8. あなた以外に養育および介護が必要な家族の方はいますか。その続柄も教えてください。
 ①いる（ ） ②いない
 9. ご両親はお仕事されていますか。
 (父親) ①はい ②いいえ ③わからない
 (母親) ①はい ②いいえ ③わからない
 10. 住宅状況: ①一軒家 ②アパートなどの集合住宅 ③その他（ ）

B. 家族の困難・ニーズ

11. 家族が困っていることがありますか。例えば、「親が働けない」「経済的に苦しい」「家族のけんかが絶えない」「兄弟にも迷惑をかけている」「家に居場所がない」等、自由にお聞かせください。

<保護者の健康について>

A. 保護者の健康状況

12. 養育者の健康状況: ①健康である ②やや不調である ③病院に通っている
 (病名)

B. 保護者の健康上の問題・ニーズ

13. 保護者の方の健康面で心配なことはありますか。例えば、「いつも疲れている」「忙しくて病院に通えない」「イライラすることが多く心配」等、ご自由にお聞かせください。

14. 保護者の方の健康面で「こうすればいいのではないか」など改善したいと思うことはありますか。

2

<親子関係について>

A. 親子関係の状況

15. 親離れ、子離れはできていますか。
 ①どちらともできていないと思う ②親の方が子離れできていないと思う ③子どもの方が親離れできていないと思う ④どちらともできていないと思う

B. 親子関係の困難・ニーズ

16. 親子の関係で困っていることがありますか。例えば、「自分に手を出しすぎ」「親がいないと不安」「他人からの介助は嫌だ」「甘やかしすぎ」「あまり関わってくれない」等、感じていることをお聞かせください。

17. 親子関係で、「こうなってほしい」と思うことはありますか。例えば「干渉しないでほしい」「自分の意思を認めてほしい」「もっと関わってほしい」「卒業後、親と離れた生活がしたい」等、保護者に対しても自分自身に対してもご自由にお答えください。

A. 地域や社会的支援の状況

18. 日常的に福祉サービスを利用していますか。
 ①利用している ②利用しない
 19. 「利用している」と答えた方は、どのようなサービスを利用していますか（ショートステイも含む）具体的にお願いします。

B. 地域や社会的支援についての困難・ニーズ

20. 地域や社会的支援で困っていることはありますか。例えば、「自由に移動支援が受けられない」「手続きがわからない」「周りの目が気になる」「障害者への理解が弱い」等ご自由にお聞かせください。

21. 地域や社会的支援で「こんなサービスがあればいい」など、必要だと思われる福祉サービスについてお聞かせください。

3

【寄宿舎への質問】

A. 入舎について

22. この学校を選択した理由は何ですか。例えば、「仕方なく」「寄宿舎があった」「雰囲気よかった」「先輩がいていた」等聞かせてください。

23. 寄宿舎があるということは入学する前に知っていましたか？

①知っていた ②知らなかった

24. 入舎を希望した人は誰ですか（複数回答可）。

①自分自身 ②父親 ③母親 ④学校の先生 ⑤寄宿舎の先生 ⑥病院の先生
 ⑦その他（ ）

25. 自分自身の入舎理由は何ですか。例えば、「もっと友だちと過ごしたい」「自立のため」「いろいろな経験がしてみたい」「通学時間が長く大変」等、ご自由にお聞かせください

B. 入舎後の変化

<自分自身の変化>

26. 寄宿舎生活を経験し、以前の自分より成長したと感じることはありますか。ある場合はどのような面が成長したと思いますか。例えば、「自分の意見が言えるようになった」「身の回りのことができるようになった」「時分に自信が持てるようになった」「生活が改善した」「丈夫になった」等、体や心の成長や生活の変化についてお答えください。

<家族生活の変化>

27. 寄宿舎入舎によって家族の生活で変化したことはありますか。具体的にお聞かせください。

<保護者の変化>

28. 寄宿舎入舎で保護者の健康面で変化したと思うことはありますか。例えば「保護者の体の負担が減った」「通院ができるようになった」「精神的に楽になった」等、率直に感じたことをお聞かせください。

4

<親子関係の変化>
 29. 寄宿舍入舎で親子関係に何か変化はありましたか。例えば、「優しくなった」「干渉しなくなった」「自分の意見を聞いてくれるようになった」「親がいなくても大丈夫になった」等、ご自由にお答えください。

<地域や社会的支援について>
 30. 寄宿舍入舎で地域や社会的支援の関係に何か変化はありましたか。例えば、「サービスを受けるのに抵抗がなくなった」「通学の負担がなくなった」等、ご自由にお答えください。

【今後について】
 31. 寄宿舍生活が卒業後の自分にもプラスになると思いますか。
 ①プラスになると思う ②マイナスだと思う ③どちらとも言えない ④分からない
 32. 上記で「①プラスになると思う」と回答した方は、どのようなところがプラスになると思いますか。具体的にお答えください。

33. 寄宿舍に望むことはありますか。ある場合は具体的にお答え下さい。

データ化した。そのデータをもとに3つの分析の視点でまとめた。聞き取り時間は1人につき45分～60分程度とし、寄宿舍内の静養室で実施した。また、聞き取りにあたってはいつでも研究協力者の意向で中断・中止できることを伝えた。

4) 分析の視点：①中学校までの生活と現在の生活状況、とりわけ、家庭での過ごし方、家族の状況、保護者の健康状況、親子関係、地域社会との関りについて聞き取り、知的障害のある高校生の生活実態を明らかにする。②自分自身の生活、家族の生活、保護者の健康、親子関係、地域社会との関係について、困ったり悩んだりしていることを聞き取り、知的障害のある高校生の生活上の困難・ニーズを分析する。③寄宿舍生活を通して高校生が実感している自分自身の変化から、寄宿舍教育の役割を考察する。

5) 調査期間：2018年9月～10月。学校・寄宿舍の許可のもと、夕食後の可能な時間帯に調査者が寄宿舍に出向き、寄宿舍の一室にて聞き取りを行った。

6) 倫理的配慮：上記研究は筆者の所属する大

学の倫理委員会に研究目的・内容・研究計画を提出し、倫理委員審査会で承認されている（18-001）。

2. 調査結果

（1）回答者について

回答者の学年は、2年生19人、3年生7名。男子19人、女子7人。主な障害は知的障害20人（76.9%）、発達障害（ASD、ADHD等）8人（30.8%）、その他6人（重複）。障害程度は、全員が療育手帳B判定で地域の特別支援学級からの入学である。卒業後の進路希望は、「一般就労」11人（57.9%）で全員が男子、女子は「未定」の1人を除き、全員福祉的就労であった。家族構成は、ひとり親家庭8人（30.8%）と3割を占め、きょうだいに「障害あり」は7人（26.9%）だった（表2）。

（2）現在の家庭生活について

家庭では主に誰とどのように過ごしているかを質問した。高校生全員が主に「家族と過ごしている」と回答し、「時々友だちと過ごす」と回答した人は6人（主に3人含む）（25.0%）、そのうち3人が地元の友だち（特別支援学級で一緒）、3人が高等特別支援学校の友だちで地元が同じという友だちと過ごしていた。長期休業中になると「ひとりで過ごす」が増える傾向にある（図2）。

主に家の中で過ごしている人は24人（92.3%）。その多くが、「インターネットやゲーム」あるいは「テレビやビデオを観て過ごしている」と回答した。高校生になるとさらに生活が単調で限られた人間関係になっていると思われる（図3）。

一方で、18人（69.2%）が現在の生活に困ったことや不満は「ない」と回答し、7割の寄宿舍生は特に不満を抱いていなかった。

表2 調査協力者一覧

	学年	性別	主な障害名*	障害程度	出身中学	進路希望	家族構成
A	2年	男子	アスペルガー症候群	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	
B	3年	男子	ADHD	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	母子家庭
C	2年	男子	精神運動発達遅滞, 軽度の統合失調症の疑い	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	父子家庭, 祖父母同居
D	3年	男子	知的障害, 発達性協調運動障害, 吃音	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	兄障害あり
E	3年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	母子家庭
F	2年	男子	知的障害, ウィリアムス症候群	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
G	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	母子家庭, 祖父母同居
H	2年	男子	アスペルガー症候群	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	祖父母同居
I	2年	男子	知的障害, ASD	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
J	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	
K	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	母子家庭, 祖父母同居
L	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	母子家庭, 祖父母同居
M	2年	男子	ASD, 若年性ミオクロニーてんかん	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	
N	3年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
O	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
P	2年	男子	知的障害, 自閉症	療育手帳B判定	特別支援学級	未定	母子家庭
Q	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	
R	3年	男子	知的障害, 選択性緘黙	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	妹障害あり
S	2年	男子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	一般就労	父子家庭, 祖父母同居
T	3年	女子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	姉障害あり
U	2年	女子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	姉, 妹障害あり
V	3年	女子	広汎性発達障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
W	2年	女子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
X	2年	女子	自閉症	療育手帳B判定	特別支援学級	未定	母子家庭
Y	2年	女子	ダウン症候群, 知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	
Z	2年	女子	知的障害	療育手帳B判定	特別支援学級	福祉的就労	姉障害あり

*障害名は診断を受けた機関による

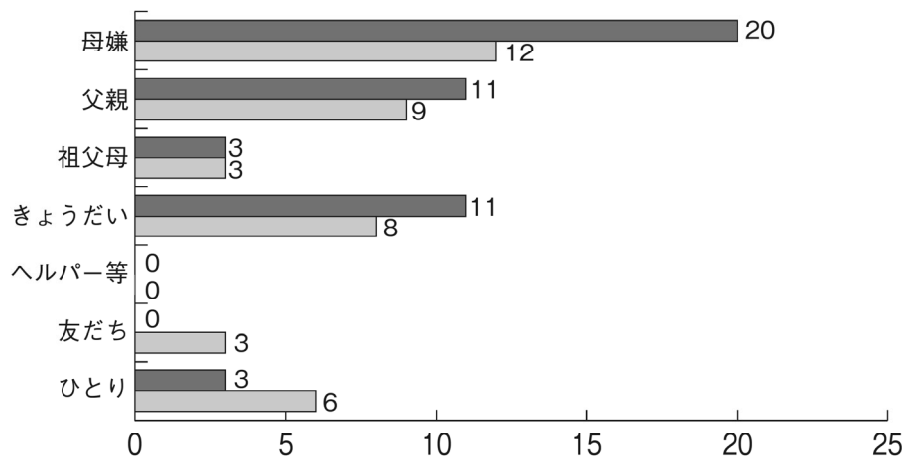


図2 「主に誰と過ごしているか（平日・長期休暇中）」（複数回答：件）

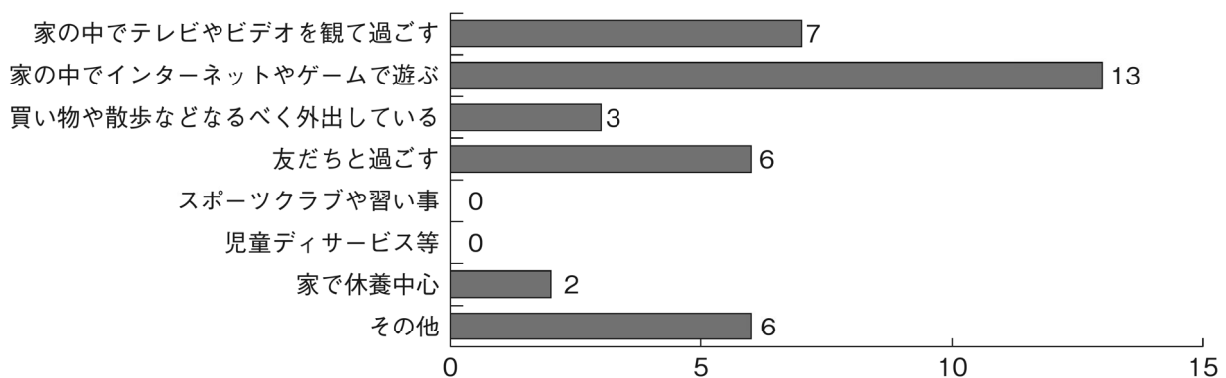


図3 「平日の過ごし方」（複数回答：件）

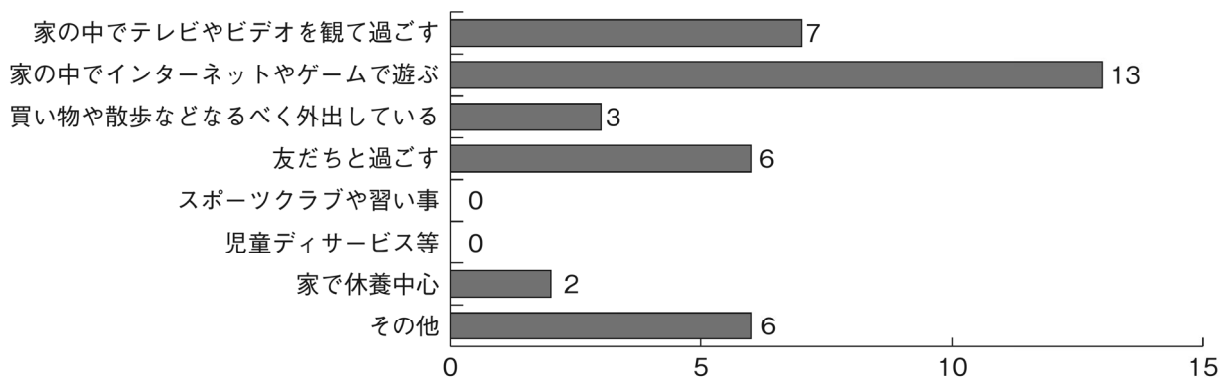


図4 「小中学校時代の〈悩み〉〈困りごと〉」（複数回答：件）

（3）高等特別支援学校入学以前（小中学校） の悩み、困りごと

聞き取りした高校生の7割が、「現在の生活に困難を感じていない」と回答したが、小中学校時代の生活の様子を聞くと、当時、経験した困難が語られた。彼らの語りから、小中学校時代の〈悩み〉〈困りごと〉をカテゴリー化し整

理した（図4）。

1）コミュニケーションの困難

小中学校時代の〈悩み〉〈困りごと〉で一番多かったのは、「コミュニケーションの困難」10人（38.5％）であった。具体的には、「自分から話しかけられなかった」「知らない人とはあまり話せなかった」「自分を出せなかった」

「クラスの友だちから冷たくされたので話せなくなった」等、知らない人だけでなく友だちともうまく会話ができなかったことが語られた。その背景には、Gさんのように過去の嫌な体験やいじめ被害が要因と思われるケースや、Uさんのように特別支援学級では同級生と関わる機会がなく、ほとんど教師との関りだったことからうまく友だち関係が築けなくなったケースもあった。

Gさん：「自分から話しかけられなかったし、趣味などが合う友だち以外の人から話しかけられてもうなずくことしかできなかった。中学校のころは、いじめられていた。ばい菌扱い。人のいないところでやられる。誰にも言わなかったし、親にも言えなかった」

Uさん：「知らない人とは話しづらい。クラスの友だちから冷たくされたので話せなくなった。中学校では友だちもいなくて先生とばかりだったので、同年代の人と話せなくなり、そう感じるようになった」

2) 友だち関係の困難

次に多かったのが「友だち関係の困難」8人(30.8%)。「友だちがあまりいなかった」「話題についていけなかった」など、友だち関係の希薄さや同年代の友だちとうまく関係を築けていない様子がうかがわれた。また、Xさんのように、友だちと仲良くしたいと思っているが、うまくできないことを心配したり悩んだりしている人もいた。

一方で、Jさんは「みんなあまり反応してくれなかったけど、みんなを笑わそうとした」として、何とか友だちとつながりをつくろうと懸命に努力している姿もみられた。また、Aさんのように、中学校時代の嫌な経験から、週

末、地元に戻っても周囲の目を気にしてほとんど外出もできない人もいた。

Aさん：「中学校の同級生から嫌がらせがあり、気持ち的に…怖い。週末、自宅に帰っても周囲の目が怖い」

Jさん：「中学の時はあまり楽しくなくて自分を出せなかった。恥ずかしかった。みんなあまり反応してくれなかったけど、みんなを笑わそうとした」

Xさん：「中学の時は友だちがあまりなくて、グループの人と仲良くしたいと思っていたけど、気持ちが落ち着かなくなっていて迷惑をかけていた。なんであんなこと言ったのか、動いたのかと思ってしまう」

(4) 親子関係の状況と悩み、困りごと

寄宿舎生活は一定期間、親元から離れた生活となる。入舎による親子の物理的距離が、親子関係にどう影響したかについて振り返ってもらった。〈親離れ〉〈子離れ〉に関しては12人(46.2%)が「両方できている」と回答し、「不明」が5人(19.2%)。その中には「自分できていると思うけど親はわからない」、「両方できていると思うが自信はない」と回答した(図5)。あくまでも子どもからは「親離れしている」と認識している場合が多かった。

親子関係での悩み、困りごとに言及した寄宿舎生12人のうち5人(41.7%)が親からの干渉に対する不満であった。具体的には、「〇〇しなさいと言われる。黙っていてほしい。知っているし分かっている」「いろいろ口を出してくる。もっと自由にさせてほしい」「ちゃんと自分がやっていないと言われる」等である。また、「中学の時、親とのコミュニケーションが取れていなかった」「中学までは親子けんかは1度もなかった。父に逆らったりしたことがな

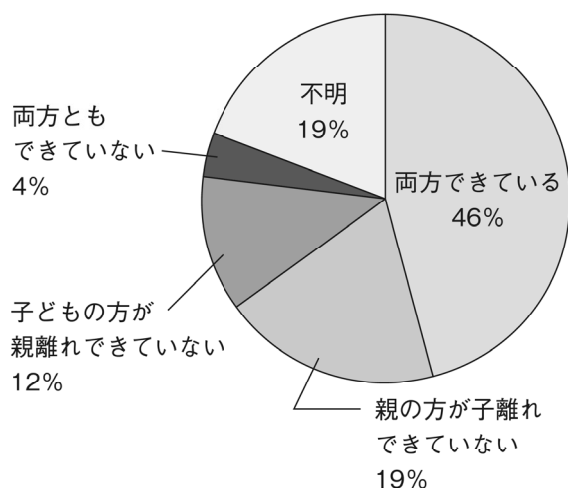


図5 「親離れ子離れの状況」

い、逆らうと殴られる」と親子の関係性の問題も語られた。一方で、Mさんのように親から言われていることは必要だと感じ、折り合いをつけている人もいた。

全体としては「特にない」が14人（53.8%）で、半数以上の人は親子関係が良好だった。

Bさん：「とにかくうるさい。家に帰ったらカーテン閉めろ、電気消せ等言う。黙っていてほしい。知っているしわかっている」

Mさん：「うざいと思うが将来にとって正しいことを言っているので文句はない。例えば女子に手を出しちゃいけないとか」

（5）寄宿舎併設高等特別支援学校を選択した理由

A 高等特別支援学校を選択した理由をカテゴリー化し図6に示した。入学理由で一番多かった理由は、「学校環境・学科の教育内容が魅力」8人（30.8%）、次いで「寄宿舎への期待」8人（30.8%）であった。その他は、「卒業後の進路や仕事のため」5人（19.2%），「先輩が優しそう」「先輩のようになりたい」などが5人（19.2%）であった。

一方で、「自宅から一番近かった」4人（15.4%）「普通高校に行きたかったが、難しいと言われた」など「仕方がなく」を選択した人が4人（15.4%）と一定数だが存在した。

（6）寄宿舎への期待と不安

寄宿舎に入舎した理由をカテゴリー化し図7に示した。寄宿舎の入舎理由で一番多かったのは、入学したい特別支援学校が自宅から通えるところがないといった「仕方がなく」が9人（34.6%）で3人に1人が入舎に消極的であった。親や教師から「自立のため」と説得されたり、Eさんのように「刑務所だと思い、囚人扱いされると思った」など、嫌々入舎した人や、何とか自分の中で折り合いをつけ入学、入舎してきたケースも少なくなかった。

一方で「生活技術の獲得」8人（30.8%）や「友だちや先輩の存在」7人（26.9%），「コミュニケーションの力をつける」5人（19.2%）等

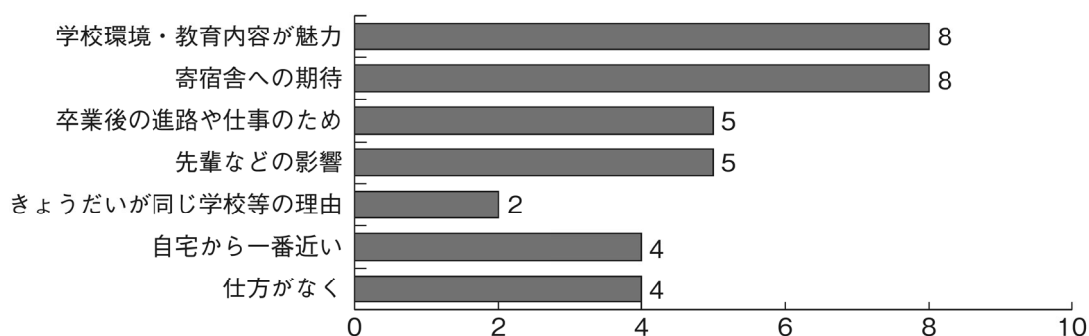


図6 寄宿舎併設高等特別支援学校への入学理由（複数回答：件）

の期待する声もあった。

1) 期待の声

Aさん：「寄宿舎があったから入学を決めた。親がいなくても1人で生活できるようになりたかったから」

Jさん：「社会に出た時に自立して働ける。生活の術が学べる。普通の高校に行ったら勉強はできるかもしれないけど、社会に出たら役に立てることが学べる。小学校6年生の時にこの学校に来てここに決めた。生徒がすごい声を出して立派な挨拶をしてくれ自分もそうなりたと思った。寄宿舎は1人暮らししたとき、身の回りのことができて困らないと思った。団体生活なので、人と関わる機会が多いのでたくさん話せると思った」

Mさん：「まず、親離れするため。洗濯や掃除、整理整頓ができるようになり自立するため」

Xさん：「体力的にも精神的にも強くなりたいと思った。自立した生活を送りたい。見学来た時にそういう話をされ、ここで生活してみたいと思った」

Zさん：「コミュニケーションがうまくできるようになればいい。人間関係がうまくなれるといい」

2) 不安の声

Bさん：「ここで暮らすのかと不安だった。本当にやっていけるのか。中学の友だちと別れるのもつらかったが、ここの先輩が優しかった」

Dさん：「最初は嫌だった。見学の時、自分は普通の子だと思っていた、ここでいじめられないか不安だった。でもそんなことはなかった」

Eさん：「中学の先生にすすめられ、仕方なし決めた。本当は〇〇校に行きたかったが、担任からダメと言われた。理由は運動も手伝いもしていなかったので無理と言われた。〇〇校は倍率が高くてダメで、いろいろ慰められてここに来た。家を離れるのも嫌だと思っていたが、通えなくて仕方なく、寄宿舎に入った。運命だと思った。最初は刑務所だと思い、囚人扱いされると思った。でも、家から離れて社会人になるための訓練だと思った」

Fさん：「学校が近かったら寄宿舎に入っていなかったかな？仕方なしに入った。でも、友だちがたくさんいるからいいかな？と思った」

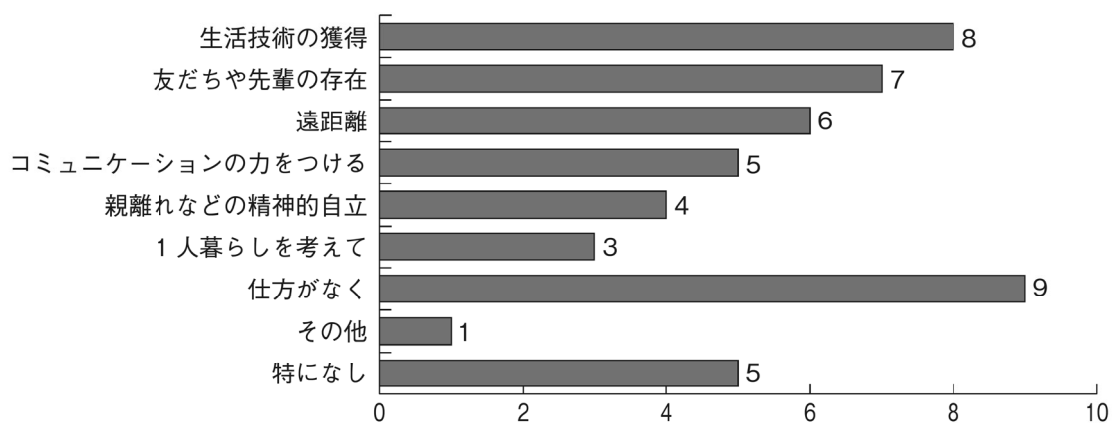


図7 寄宿舎入舎の理由（複数回答：件）

(7) 寄宿舎生活の経験によって自分自身が変化したこと

聞き取りをした全ての高校生は、回答内容から寄宿舎生活を通して自分自身の変化を実感していることがうかがえる。自分自身の変化で一番多かったのは「生活技術の獲得や生活リズムの確立」19人(73.1%)、次いで「コミュニケーションの力、人間関係の力」16人(61.5%)、「親子関係の変化」12人(42.6%)、「自ら行動できる力」9人(34.6%)と続く(複数回答)。

1) 生活技術の獲得や生活リズムの確立

7割以上の高校生が、洗濯や掃除、身の回りの整理整頓など生活技術が身についたと感じていた。加えて、単に生活技術・スキルの獲得だけでなく、自らの生活を組み立てる力がついたと感じていた。また、それらの力は、寄宿舎生活だけでなく、家庭での生活でも発揮されており、7人(26.9%)が、寄宿舎でつけた力を活かしながら、卒業後の1人暮らしやグループホーム、通勤寮といった親から独立した生活を見通していた。

さらに筆者が注目したのは、中学校まではゲームばかりの生活だったSさんが「高校生になってはじめて退屈だと感じるようになった。高校での生活で暇だという感情がでてきた」という語りである。これまでの単調な生活が当たり前になっていたことで気づかなかった感情、「退屈だと感じる気持ち」が特別支援学校や寄宿舎での生活を通して引き出されたと推測される。

Aさん：「身の回りのこと、洗濯や自炊などができるようになった。家でも時々やっている。自分から「やります」と言えるようになった。積極的になった」

Eさん：「生活リズムがついた。洗濯など

もできるようになった。部屋をきれいにしたり、生活力もついた。自分で時間をつくること、例えば早めにやることやって、時間をつくれるようになった」

Hさん：「まずは掃除のとき、積極的に動ける。配膳や掃除の工程を覚えたり……家でも掃除を時々するようになった。また、決まった時間に起きることや、早起きができるようになった」

Jさん：「余暇の使い方が上手になった。2時間あるから本を読もうとか今日は元気だから友だちと話そうなど、自分で生活を考えて行動できるようになった。昔は運動が嫌いだったが、高校1年から運動をして、79kgから72kgに痩せ自信がついた。今は自分から運動するようになり日課になった」

Sさん：「中学校の時はひどかった。家から絶対出なかった。ゲームばかりしていた。(外に出るのが)めんどくさかった。でも、今が一番快適。高校生になってはじめて退屈だと思うようになった。高校での生活で暇だという感情がでてきた」

Xさん：「自分で時間のタイミングをみて洗濯や明日の準備などできるようになった。日課に追われている感じでいたが、1年生の2学期からは時間を見て動けるようになった」

2) コミュニケーションの力、人間関係の力

コミュニケーションや人間関係の変化を感じている高校生も6割以上と多かった。全員が地元の特別支援学級から入学しており、中学時代はほとんど友だちと話すこともなく人との関りに苦手さを感じていた。しかし、中学校では「ばい菌扱いされ、いじめられていた」と話したGさんは、友だちと生活を共にし、一緒に

活動する中で、「今は、普通に話せるようになった。なぜかはわからない」と語った。選択性緘黙のRさんは「これからどんな生活をしたいか?」という質問に対し、「みんなと話がしたい」と筆談で語ってくれた。友だち同士が楽しそうに会話している様子を見ながら、「自分もそのような生活がしたい」「そこに加わりたい」と感じるようになったと推察される。また、Zさんは、苦手な友だちともうまく付き合っていけるようになったと語ってくれた。

Gさん（中学までいじめられていた）：「自分からは話しかけられなかったが、今は人と話せるようになった。卒業後、職場の人との関係でもプラスになると思う。中学の時は人と話すのが面倒で全く話さなかった。今は、普通に話せるようになった。なぜかはわからない」

Mさん：「中学校の時は自分から話しかけることが出来なかったが、今は、自分からコミュニケーションがとれるようになった。慣れた。（寄宿舎は）人間関係が築けると思う。ここを出た後、職場の人と話したりできると思う」

Eさん（入舎前は刑務所だと思っていた）：「1年生の後半ごろから楽しくなった。今は楽しい。（楽しさって何?）クラスの人と話したり、先生たちと話したりできるようになった。学校祭の実行委員もやって、中学までは人前が苦手だったが鍛えられた。（みんなの）前にでてやることができたようになった」

Rさん（選択性緘黙。筆談で聞きとり）：「中学までは、（人と話せないことは）特に困っていなかった。人と話す必要がなかったし、さみしいもなかった。でも今はみんなと話したいと思う」

Zさん：「困ったときに相談できるようになった。嫌な人とも我慢できる。付き合っていけるようになった」

3) 親子関係の変化

4割以上の高校生は親子関係の変化を感じていた。特に、中学時代にはほとんど親と話することがなかった人が、寄宿舎から家に帰ると学校や寄宿舎でのこと、友だちのことを話せるようになり、親子関係が変わったと感じていた。また、離れて暮らしているからこそ、「親を大切にしようと思う」と話す高校生や親も子どもの成長を実感しているケースもあった。

Cさん：「1年で父親と普通に話せるようになった。中学まで親子けんかは1回もなく、父親に逆らったりしたことはなかった。父とは話せなかった。それが癖になっていた。高校生になって自分から話せるようになった。入舎して一か月後家に帰った時に「成長したね」とほめてくれ、嬉しかった」

Jさん：「今は友だちとたくさん関わるので、そのことを親にたくさん話をするようになった。前は、〇〇があったなどやったことを話していたが、今は友だちのことなど話すようになった。自分は仲間とか先生とかがいるので平気なので、自分は親離れできていると思う」

4) 自ら考えて行動できる力

3割以上の高校生が「自分から行動できるようになった」と回答した。Fさんの「昔は言われて動いていた」という言葉が象徴するように、「指示待ち傾向」だった自分が仲間との生活を通して、自ら考え行動できる力をつけたと感じている。

Fさん：「自分から積極的に掃除をしたり，友達の手伝いをするとうみんなからお礼を言われたりしてうれしい．積極的に自分から動いたり，コミュニケーションなどもとれるようになった．昔は言われて動いていた」

Jさん：「中学校の友だちより高校の友だちの方が自分をわかってくれるし楽しめる．中学の時はあまり楽しくなくて，自分を出せなかった．恥ずかしい．今は，自分のためにやっている．それに気づけた」

Tさん：「好きな先輩や友だちもできた．1年生の後半から自分を変えたいと思った．先生からの働きかけで1年生の2月に生徒会役員に立候補し2年生の時に会計を担当した．自分のやりたいことが出来ると思った」

(8) 寄宿舎生活への要望

8割以上の寄宿舎生は，寄宿舎生活が卒業後の自分にプラスになると回答した．その上で，さらに寄宿舎に対する要望を聞いた．「就寝時間を21時から22時に遅くしてほしい」「毎日入浴がしたい」「夜食をたべたい」「買い物など遠くまで行きたい」などが出された．また，「男子棟と女子棟との交流．談話室を毎日使えるようにし，触れ合う場が欲しい．触れ合っていないと社会に出たときに困る」「男女交際を認めてほしい」「自分でお金の管理をしたり，スマホを自由に使えたり，もう少し自己管理できるようにしてほしい」といった青年期らしい要望もだされた．

一方で「先生たちに要望を出せない」「先生と交渉できない」など，あきらめている様子もみられた．寄宿舎の生活環境や職員の体制など厳しい状況はあるが，生活者である彼らの声を

丁寧に聞き取っていくことは重要である．そして，「自分を変えていく」「自分の生活を変えていく」ことを通して生活の主人公として「自分を生きる」ことにつながっていくのだと思う．

3. 考察

今回の調査対象はいわゆる身辺自立を獲得し，多くが一般就労を目指し，卒業後は「1人暮らし」を考えている寄宿舎生も多かった．そして，少なくない寄宿舎生は寄宿舎生活を「仕方なく」あるいは「様々な不安」を抱えながらスタートさせていた．しかし，寄宿舎生活を通して，洗濯，掃除，整理整頓はじめ，日課を通して生活の見通しをもち，自分で生活を組み立てることができるようになったと語ってくれた．家では「できる力」があったとしてもその力を発揮できない・しない生活では，一人暮らしをイメージすることも親から独立したい意欲も生まれにくいだろう．したがって，どうしてもおとなの介入が入りやすい障害児，とりわけ高校生段階では，主体的な生活を送る経験を意図的に設定することは重要である．

また，親元から離れた生活経験は，親子関係にも変化が見られた．本調査では半数以上の寄宿舎生が親子関係に困難を感じておらず，「良好」と思われた．しかし，寄宿舎生活を経験してからの親子関係に変化があったと回答した寄宿舎生は，「以前はほとんど親と話さなかったが，今は自分から話せるようになった」と語った．また，寄宿舎から家に帰ると保護者から「成長したね」と言われ，親に対し寄宿舎生も「優しくなった」と感じている．物理的距離をもつことでお互いを客観視することができ，親子関係の再構築が図られていくと示唆される．

また，今回の調査では，高等特別支援学校入学前の生活での悩みや困りごとで多かったのが

「コミュニケーションの困難」10人（38.5%）、「友だちがいない、友だち関係が作れない」8人（30.8%）であった。「自分から話しかけられなかった」「知らない人とはあまり話せなかった」等が多く語られ、その背景には、過去のいじめ経験や友だち同士が自由に語らい合う機会や時間が乏しいことが影響していることもうかがわれた。しかし、彼らの中学までの生活を見ると、ほとんどの人が学校以外では「家の中」で「家族か1人」で過ごしていた。人間関係が広がるであろう高校生になっても、人間関係を育む機会や環境が少ない実態にある。

しかし、中学校までコミュニケーションや友だち関係で困っていた彼らが、同じ障害のある生徒が通う特別支援学校や寄宿舎生活を経験する中で、6割以上の方がコミュニケーションや人間関係の変化を感じていた。物心がついたころより選択性緘黙だったRさんが「今はみんなと話したいと思う」と語り、日々の仲間との生活の中で、「話したい」気持ちが膨らんでいると感じる。そこには、「話しても大丈夫」といった安心できる関係があることが大きい。

また、Fさんの「自分から積極的に掃除をしたり、友だちの手伝いをするとみんなからお礼を言われ嬉しかった」や「自分を変えたい」と思い生徒会役員に立候補した」Tさんのように、集団生活の中でそれぞれの役割を担い、自己有用感のある生活や、自分から友だちの手伝いをする中で、「ありがとう」とお礼を言われ、それがうれしく感じるといった経験を通しお互いの関係性を高めていると思われる。憧れの先輩や安心できる友だちの中で「自分を変えたい」と思い、新たなことにもチャレンジできるようになる経験を通して、主体的に行動できるようになっていくのだろう。

その他、家庭でゲームばかりの生活から友だちとの刺激のある生活を体験する中でSさん

は「退屈だと感じるようになった」「暇だという感情がでてきた」と語った。単調な生活しか送っていないと、その生活に違和感を持つことも、変化を求めることもないのである。充実した仲間との生活でこそ自らの生活を変えようとする意識や行動が引き出されるのだろう。

おわりに

本調査から、知的障害・発達障害を有する寄宿舎生は、小中学校時代に同年代の友だちとのコミュニケーションや人との関わりの困難を抱えていることが明らかとなった。しかし、高等特別支援学校や併設された寄宿舎での生活を通して、生活技術の獲得や生活リズムの確立、そのことが卒業後の自立した生活への意欲や見通しにつながっていることが示唆された。また、困難と感じていたコミュニケーションや人との関わりが、親元から離れ、同じ障害のある仲間との生活を通してできるようになり、さらには自ら考えて行動できるようになったと実感していた。とりわけ障害のある子どもの場合は、親が手を出しすぎる傾向があることから、親から離れた仲間との生活は子どもの主体性を引き出すうえで大きな役割を果たしていると推察される。

一方で、障害児の生活がきわめて単調であり、人間関係や経験の乏しさが、思春期・青年期以降も続いているが、多くの場合はそのような生活に不満も苦痛も感じていない。しかし、同じ障害のある仲間が通う特別支援学校や寄宿舎での何気ない友だちとの会話や関わり、遊びを通して、はじめて単調な生活を退屈だと気づくということがSさんの語りから気づかされた。思春期・青年期にこそ人間関係の広がり、豊かな生活経験・社会経験が重要であり、感情を豊かにし、思考を深めるのである。

今回の調査は、対象が全て地元中学校の特別支援学級から高等特別支援学校に入学してきた高校生であることから、寄宿舎といった生活のみが彼らの生活や意識を変えたとはまでは言及できない。また、聞き取り調査は、対象者が調査の趣旨をある程度理解し、言語による意思疎通が可能であることから、知的障害のある子ども全体を表すものでもない。その点を考慮し、寄宿舎のない学校の調査や面接調査方法の検討も必要であり、今後の課題としたい。

(おのがわ ふみこ)

附記

本報告は、平成30年度科学研究費補助金「基盤研究(C)18K02975」(研究代表：小野川文子)による成果の一部である。

謝辞

本研究にご協力いただきましたA高等特別支援学校(知的障害)の寄宿舎生の皆さまに深く感謝申し上げます。

注

- 1) 鈴木勲編(2002)『逐条学校教育法 第5次改訂版』学陽書房では、寄宿舎を設けないことができる「特別な事情」とは、就学者が自宅から通学可能な範囲にのみ居住する場合とか、医療機関とか児童福祉施設に併設する学校で、就学者が医療機関又は児童福祉施設の入所者に限定している場合とされている。
- 2) 鳥取県では「特別支援学校における教育の在り方検討委員会報告」(2010年1月)の中で「学校設置形態の議論の中で、通学の利便性から分校、分教室の希望が多かったが、一方で、高等特別支援学校には通学の時間がかかって、寄宿舎を利用して通学させたい保護者の声も多く、遠距離通学および通学困難な生徒に対応するために寄宿舎を設置する」とし、2013年4月に軽度知的障害を対象とした高等特別支援学校を開校。宮城県では、知的障害特別支援学校の在籍児童生徒数の増加、とくに軽度知的障害高等部生への対応から、2016年4月に全県を対象とした全寮制高等特別支援学校(知的障害)を開校。山梨県では「『産

業現場等における実習』と連携した生活指導を進めます」「寄宿舎を設置していない知的障害特別支援学校の生徒の利用を進めます」として寄宿舎の積極的な有効活用を打ち出し(山梨県教育委員会「やまなし特別支援教育推進プラン～一人ひとりのニーズに応じた特別支援教育の充実に向けて～」2011年7月)、そのことは2015年4月の寄宿舎併設高等特別支援学校(知的障害)の新設にまで至っている。

引用・参考文献

- 原田徳恵・寺川志奈子(2017)知的障害のある青年の働く意欲を支える特別支援学校高等部教育のあり方―卒業生へのインタビュー調査から―、『地域学論集』13(3), pp.61-81.
- 寄宿舎教育研究会編(2005)「障害児学校寄宿舎の歴史と現状」寄宿舎教育研究会25周年記念集会資料.
- 厚生労働省社会・援護局障害保健部(2018)「平成28年生活のしづらさに関する調査(全国在宅障害児、者等実態調査)」.
- 文部科学省「学校基本調査」(平成12年～平成30年).
- 森口弘美(2010)知的障害のある人の青年期における親子関係の変容についての一考察―親による語りのエピソード記述を通して―、『社会科学』第93号, pp.45-65.
- 森口弘美(2015)『知的障害者の「親元からの自立」を実現する実践』ミネルヴァ書房.
- 中嶋学・渡邊健治・田中謙(2013)知的障害者の離職から再就職についての一研究,『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第64巻2号, pp.43-55.
- 小野川文子・高橋智(2012)病弱特別支援学校寄宿舎における病気の子どもの「生活と発達」の支援,『SNEジャーナル』第18巻1号, pp.148-161.
- 小野川文子(2013)特別支援学校の寄宿舎教育に関する研究の動向と課題,『特殊教育学研究』第50巻第5号, pp.451-461.
- 小野川文子・高橋智(2015)卒業生調査からさぐる肢体不自由特別支援学校併設の寄宿舎の役割―寄宿舎経験のある卒業生の面接法調査から―,『SNEジャーナル』第21巻1号, pp.186-199.
- 小野川文子・高橋智(2018)知的障害児の「育ちと発達の困難」の実態と寄宿舎教育の役割

- 一寄宿舎併設知的障害特別支援学校の保護者調査から一,『SNE ジャーナル』第24巻1号, pp.154-165.
- 小野川文子・高橋智(2019) 全国の特別支援学校寄宿舎の現状と課題—都道府県教育委員会・寄宿舎併設特別支援学校のウェブサイト調査より一,『SNE ジャーナル』第25巻1号, pp.124-135.
- 小野川文子・高橋智(2021) 知的障害児とその家族の生活実態の検討—北海道の知的障害特別支援学校の保護者調査から一,『発達障害研究』43(1), pp.77-91.
- 小野川文子・田部絢子・高橋智(2016) 卒業生調査からみた病弱特別支援学校および寄宿舎の教育的役割と課題,『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』67, pp.81-89.
- 大泉溥(2010) 戦後日本の障害児学校における寄宿舎問題の展開,『障害者問題研究』第38巻第3号, pp.2-11.
- 佐々木健太郎・野口和人(2015) 知的障害特別支援学校高等部におけるコミュニケーションに関する指導の現状と課題,『宮城教育大学特別支援教育総合研究センター紀要』第10号, pp.83-92.
- 高橋智・池田敦子(2017) 知的障害高等部生徒の困難:「育ちと発達の貧困」と特別支援教育(下),『内外教育』第6627号, pp.8-10.
- 田中智子(2012) 知的障害者の生活の場の移行とおやこの自立—生活の場の移行を経験した知的障害者の親たちの語りに見る親役割の変容—,『脱施設化政策における知的障害者のグループホームの機能とその専門的支援の研究』pp.79-102.
- 田中敦士・細川徹・稲垣真澄(2009) 知的障害者入所施設における知的障害者のグループホームへの移行率,就職率および離職に伴う施設入所率の実態—全国実態調査の結果から一,『琉球大学教育学部紀要』第74号, pp.101-107.
- 東京都社会福祉協議会(2008)「福祉,教育,労働の連携による知的障害者の就労・生活支援—連続性のあるチーム支援モデルの提案—」.
- 土屋葉(2002)『障害者家族を生きる』勁草書房.